

ぐるめにいこおう

ねこです。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いくら強いヒーローがいても、  
いくら悪を取り締まっても、  
狂気は身近にやってくる。

元のアカウントにログイン出来なくなったので投稿しました。ねこです。よろしくおねがいします。

ちよつくら書き直します。

現在ぶろろおぐ書き直しました。

# 目次

ぷろろおぐ	1
かいこおう	9
ばんのおう	17
小話①	36
く喰ヶ崎	
刃食の1日	
く	
はじめあり	42
こうええん	52
ほしよく	63
にゆうかあい	77
しょうげえき	85
しゅうげえき	92
てえき	99

せんとおお	107
きいき	113
いちげえき	120
きよううふ	129
いかあり	136
颯り	146
激突	155
再せえい	160
小話②	165
くお店	
く	
こうちやあく	169
小話③	173
く馴れ初め	
く	
かけつうけ	177
しんじょう	181

お  
わ  
り



ぷろろおぐ

ガツガツ

ムシヤムシヤ

モグモグ

ごっくん

その音は

仄暗い闇の奥から溢れきた。

誰がきいてもそれがナニかを食べている音だとわかる。

パスタかな？

ステーキかな？

魚のムニエルかな？

否。

どれも違う。

それは料理にすら当て嵌まりしない。

光の無い空間の中、咀嚼音を奏でているのは1人の青年。

彼はそれを驚掴みにして野生の獣の如く食らっている。

それは人

人の頭を

人の手を

人の脚を

人の臓物を

彼はつかみかじりすすっていた。

人1人分の肉塊があつたはずだが

瞬く間になくなっていく。

食べきった青年は虚空を見上げる。

そして吐息に限りなく近い声を発する。

「ああ」と

その声には悲哀と恍惚

二つの想いが含まれていた。

くくくくくくくくくくくくくくく

『個性』

『個性』は所謂他人同士の僅かなる違いの差ではなく

ある時から人々が持ったチカラ

それにより一度壊れそして新しく世界は構成された。

<sup>超常</sup>個性がアドバンテージとなる社会に

だがその中で

『個性』の見込みがないといわれ続けてた少年がいた

道ゆくものに後ろ指を指され、

同い年には暴行され、  
親にも見捨てられた。

だが少年は生き続けた。

彼はどんなに辛いことがあっても彼は健気に生きていた。  
仕方のない事なのだと。

だが

それでも

彼の中には

重い重い

闇が積り、燻っていた。

そして少年が青年へと至る時

彼はあるものを見つけた

それは

『個性』がない時代に起きた事件の資料だった。

青年はそれを深く深く読み込んだ。

中には一般人には目をふさぎたくなるものもあった。  
だが彼には目を惹くものだった。

そして

彼は見つけてしまった。

アルバート・フィツシュ

明確な数はわからないが多くの児童を殺し食らった、前時代の狂人。

衝撃だった。

いくら『個性』がありふれた今でさえ

ここまでの事をしでかした人はいないだろう。

もつと…もつと知りたい！

彼にとってそれは歴史の偉人にも等しくそして興味がわいた。

少年は青年と成り

青年はずっと調べた。

前時代の狂人たちを

ジェフリー・ダーマー

ヘンリー・リー・ルーカス

アンドレイ・チカチーロ

ジョン・ゲイシー

エド・ゲイン

かつての世界で人々を恐怖に陥れた犯罪者  
その事件の内容

それらの狂気が彼の秘めたる『個性』<sup>狂気</sup>を目覚めさせた。

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

「そう、これだよ」

時と場は戻り闇の中

青年が人を食った場所

「これだよ、これこれ」

青年は受け応え人がいないなか1人でつぶやく。

いや、語りだす。

「これ、これこれ、ふふふふふふ、はははははははははは。ぼくはこれをこのあじがほしかったんだまるできひんあるふはいしたりんごのようなまろやかかつえぐみのあるじょうしつなにく！にく！あ、あなぜきづかなかったのかぼくはものすごくそんをしてあんなめみもあわずにすんだがそこまでのみちのりがこれほどのけいけんちをうみだしたのうえであじとうまみとおいしさがぜつじょうでくるくるりくるりくるり、くるくるくるくるくるくるくふふふふふふ、はあああもつともつとつぎをほつしたぼくはつぎのあいっからこれをとりあいっくらつてほしいくてたまらないんだぼくはあああああ!!?!!?.....」

常人には発せられないであろう常軌を逸し狂気に満ちた言葉の羅列。

その語りの締め言葉は食人鬼アルバート・フィツシュがとある少女を食べた感想と

一緒だった。

「おいしかったよ」

ヴィラン名：カニバル

本名：喰<sup>くい</sup>ヶ崎<sup>がさき</sup> 刃食<sup>ばしょく</sup>

『個性』：万喰<sup>ばんしょく</sup>

ありとあらゆるものを食べれる『個性』

これは彼の初めてヴィランとして活動した日

かいこおう

「ごちそうさま」

喰ヶ崎　刃食がヴィラン活動を始めて約半年。

彼は32人目を食べ終えたところであつた。

なかなか量が多いが1月5人は食べている計算なので間違いはない。

「あ、あ、おいしいかったああ」

食後のカンソウを述べると彼は血みどろの体と服を気にすることなくその場から離れる。

この半年の間彼は沢山の人を食し、そしてヒーローと戦った。  
そしてそのヒーロー達も僅かながらに彼の胃袋のなかに入っている。

ある時はシンリンカムイのウルシ鎖牢を食い尽くしある時はイレイザーヘッドの捕縛用の布も食らっている。

こうして彼は初犯から僅か半年ほどでその残虐性も相まって世間一般では公表されない、ヒーロー達だけが知っている極悪ヴィランになったのだ。



「はじめまして！あなたカニバルくんですよね!!？」

「……ん、だ、だれ」

今宵は喰ヶ崎刃食の前に1人の少女が現れた。

「トガです！トガヒミコです！」

「あ、あ、あどううもお」

「こんにちは！あ、こんばんわかな？」

「…」

突如現れた少女にペースを持ってかれあまりいい気分ではない喰ヶ崎。

一方、トガヒミコと名乗った少女は顔を綻ばせ恍惚にもみえる表情をしている。

「私ね！血が好きなの！」

「…ぼおくはひとたべるのすききい」

イキナリのカミングアウトだったが取り合えず相手が言ったから自分も言う喰ヶ崎。

「ですよね！私知ってます！」

なぜこのトガヒミコと名乗る少女は喰ヶ崎、カニバルのことを知っているのか。簡単に言えば単に闇ブローカー達の方がマスコミより情報収集力が上だっただけである。

そして闇ブローカー達に可愛がられてるトガヒミコがそのことを知るのとは簡単だ。

「だからね！私あなたがモグモグした残りが欲しいの！」

「へえええええ………それってえ？」

「血です！」

「あつそおう……」

喰ヶ崎は元々の食べ途中のものに割と執着するが彼が食べたいのはニクなので血は別に興味はなかったのだにも起こらなかったがもしニクが欲しいと言われればどうなったかわからない。

「ああ、じ、じゃああこのふくをおまずあげるうよお」

「えっ本当ですか!?!」

会話だけを聞けば、男が着ている服をあげてそれに喜ぶ女性だが実際は血だらけだから猟奇性を感じさせる。

「ああ、とこつおちにいたべたばしよがああああるからそこからもらっていつていいいよよおおおお」

「はい！ありがとうございます！」

こうして2人は、喰ヶ崎刃食とトガヒミコは邂逅した。

この邂逅は予想外の事態を引き起こすことになるだろう。

「私、カニバルくんのこと好きです！」

「…そお」

# ばんのおう

「いただきます」

ヴィラン活動を始め七ヶ月。

あのトガヒミコとの邂逅から一ヶ月たった。

今夜も喰ケ☒は可愛いそうな被害者をムサボル。

「ひ、ひいいいいいいい」!!!  
「」

・  
・  
・

食べ物はその一般人。

場所は廃ビル。

彼に目をつけられたらもうタスカラナイダロウ。

「た、たた、たすけてくれえ！か、金はやる!!? 欲しいものは全部やる!!? だ、だから命だけはあ!!?!!?」

この一般人は自分の全ての物を捨て去ってでも

生に執着した。

命に執着した。

死を恐れた。

「……いらなあい」

「……へ？」

そんなの無意味なのに。

いやむしろ逆効果。

「……いらないいらなあい！そ、そんなあのいみなくしてたべたいもののまえにはむか  
ちなつてきようみすらわかずにくのみほしいいさにぼくのきようみはにく！あ、ああ、  
さあちようだああい、あななたのにくうううう！！？」

「ひっ！！？」

一般人そのものを食べたいのにそんな言葉はただいたずらに喰ヶ崎を怒らせるだけだった。

ただ

……オオオオオオ

「……？」

助けが来ないわけではない。

「デトロイト S M A A S H !!? !!?」

その声と同時に近くの壁が崩れた。

「!?」

「……」

崩れたせいで埃が舞い上がる中

壁にできた穴から1人の大男が現れる。

「私が来た!!?」

「オールマイトオオオオオオオ!!?!!?」

「…」

No. 1ヒーローオールマイト。

一般人はすぐさまオールマイトに駆け寄る。

「大丈夫かい？今さつき夜のパトロール中に叫び声がしてね。応援を呼んどいたから保護してもらうといい」

「は、はいいい!!？」

一般人は壁の穴から出て行く。

「さてと」

「……ふっ、ふひゅううふふふふ」

オールナイトは喰ヶ崎、カニバルの方へ向き直る。

「君が今巷で噂のカニバルだね？」

「ふふう、うんそそうだねカニバルでいいよおお、オオオルウマアイト」

オールマイトはカニバルに確認をとりカニバル自身もそれを肯定する。

「よし、じゃあ君を捕まえる！とその前に」

「…？」

「少し聞いてもいいかな？」

オールマイトは捕まえようとする前にカニバルに問いかける。

「君はなぜ人を食べるんだい？」

犯罪者になぜ犯罪を犯したのか。オールマイトはそれを聞いたのだ。  
犯罪の理由にもいろいろある。

生活のため

復讐のため

事故

冤罪

これらの幾つかは軽い刑罰で済むことがあるし冤罪に至っては無罪だ。

オールマイトは彼がこんな残虐な事をするのは何か致し方ないことがあるのではないかと考えていた。

「そ、だね…」

カニバルはオールマイトの問いに答え始める。

「さいしょのはふくしゅうもあつたあ…」

「復讐…」

静かに割とともに語りだすカニバル。

オールマイトも理由の中に復讐を考えていた。

復讐であれば論せると。

「だがな君、復讐はなにもうま」「でもいまはちがあああう！」

オールマイトが考えていた論し文句にかぶせてカニバルは語る。

「ほしいいんだにくをたべたくてえもうたべてうまかつたしかもおいしくだからぼくはにくをたべるるるう」

「……狂気か、ならば君にはちよつと痛い目にあつてもらうよ」

狂気の回答。しかしオールマイトはそれに呆氣にとられずに構える。

「君みたいな奴は職業柄よく見るんだ」

そういうと

オールマイトはカニバルの視界から消えた。

「……ふふ」

「デトロイト……」

オールマイトのいる場所は

カニバルの後ろ。

時間が圧縮する中

そこから必殺技を放たんと力を溜める。

(活動限界ギリギリだが1発で墮とす！)

そして放たれる

「S  
M  
A  
A  
A  
A  
S  
H  
!!?  
!!?  
」

力の奔流。

それは廃ビルを揺らし

オールマイトが放った方向の壁が吹き飛ぶ。

オールマイトもいけたと思った。

本来なら

だが現実には違った

廃ビルは揺れず

放った方向の壁も吹き飛ばさない

そしてなにより

シャク……シャク……

「っ  
!!?」

オールマイトの拳を口で受け止めるカニバルの姿。  
それがオールマイトを困惑させた。

カニバルの《個性》は『万食』

ありとあらゆるものを食べれる《個性》

そう

「ありとあらゆるもの」を

たとえばそれが

コンクリートでさえ

鉄骨でさえ

「力」でさえ

食べてしまうのだ。

「……うん、さあすがなんばああわあんひいいろおお、おおいしくてとてもうまいよおおお」

「なっ！」

「でもこれええでおなあかいつぶああいだよよお、じ、じゃああ、ねえばあいいばあいい」  
「ま、待ちたまえ！」

「ほかにもおくるううならいいよ」

（くそっ！活動限界が…!!?）

カニバルはオールマイトを置き去りにし  
闇の中に消えてゆく。

「……私も早く受継ぎ先を探さねば」

オールマイトの眩きも闇の中に掻き消える。

## 小話①

### 喰ヶ崎 刃食の1日

「やあ。画面の前のみなさん。こんにちは、私は『もう一人』のヒーロー殺しデスウーズだよ」

「たぶん、私のこと知らない人もいると思うからパツと説明するね」

「私、デスウーズは作者の前の作品『私は唯の一人の必要悪也』の主人公をしていたんだ。でもよくわからないミスをしてしまい作者が元のアカウントにログインできなくなっ  
てしまつてね」

「まあとりあえず小話でコメンテーターをやるよ。もしかしたらメタじゃなく本編にも  
登場するかもね」

「あと望まれれば前の作品もリメイクするかも（チラッチラッ）」

「コメントするときは《デ》《》みたいな感じ」  
「とりあえず行ってみようか」

〵朝〵

隠れ家で寝ている喰ヶ崎刃食。

彼の目覚めは遅い。

「……んむう……」

今日も起きた時間は午前10時だ。

デ「いや、もう昼だから。もうちょい早起きなさい。早起きは三文の得だよ?」

く昼く

喰ヶ崎刃食は朝食兼昼食をとる。

人しか食べないと思ったら大間違い。

基本はちゃんとした食事をとるのだ。

今日は前日に作っておいた肉味噌をご飯の上にのせ、牛の薄切り肉を濃い味で玉ねぎと炒めたものものせてなんちゃって焼肉丼を食べる喰ヶ崎刃食。

デ「でもやっぱり肉肉しいね：起きてから食べるもんじゃないよ」

午後1時

食べ終わったら食器を洗ってから外出。

これはいつもの日課。

この時に散歩したり買い物したりする。たまにゲーセンに行く。ちなみに某太鼓叩きゲームの記録保持者。

服装は割とラフな感じ。

デ「案外、引きこもってるかと思ったら結構出歩くのね。太鼓??達人はまあ…」  
午後5時

夕食を食べる。

ちなみに外食が多い。

結構穴場を知っておりその手の常連だったりする。

デ「えっあの店私もよく行くんだけど」

午後7時

喰ヶ崎刃食のヴィラン活動。

ターゲットは基本的に美味しそうな一般人。

ちなみに男も女も子供も老人もデブもガリも関係ないそうです。

犯行場所は裏路地、もしくは廃ビル。またはどこか森の中や人気のないトンネルなど。

食べ方は様々。

頭からかぶりつくこともあるし、手足を千切ってから少しづつ食べたり、死にくい

ように内臓を食ったり。

ちなみに割と時間をかけて食べる。

デ「うわ、趣味悪つ。根本的に苦しめながら食べるなんて」↑この人も人を口から溶かして殺しています。

午後9時

食べ終わったあとにたまにトガヒミコがやってくる。

最近ではよく血をあげている。

「ここのためにためておいたあからあねええ」

「どうもありがとうございます！」

デ「あーいいいなあー。あんな可愛い子と夜に待ち合わせかー」

午後10時

隠れ家に帰ったら汚れを落とし風呂に入る。

出たら体幹トレーニングと筋トレ。

デ「割と健康的だね」

午後11時

就寝

だいたいこの様な1日を喰ヶ崎刃食は過ごしている。

感想

デ「あれだね。もっと破滅的な日常かと思つたらそうでもなかった。彼言動と思考は狂つてゐるけど生活力はそこらのヴィランよりもいいね」

はじまあり

「刃食くん！これ、かあいくないですか!!？」

「……ん、いんじやない」

喰ヶ崎刃食がヴァイランになって約1年がたった。

5ヶ月前にオールマイトと出会ったがその後特に変わったこともなく過ごしていた。

「こつちとそつち！どつちが似合います？」

「んゝ……それえ」

「これですね！」

ただまあ変わったことといえば

ヴィラン活動以外でも

トガヒミコに合うようになったことである。

それは些細なきっかけだった。

たまたま夕食を食べようと店に入ったらトガヒミコも同じ店で食べていたのだ。

最初は「カニバルくん」と呼んでいたトガヒミコだが改めて考えると本名の方がヒーローたちにはわからないとのことでお互い自己紹介をして今では「刃食くん」「ヒミコ」と呼ぶようになった。

「このクマさんかあいいですねえ」

「かつてあげえるうよよお」

「ほんとですか？ありがとうございますです！」

今ではこうしてよく買い物をする仲である。

はたから見れば仲睦まじい元気な彼女と静かな彼氏に見え周りの人たちも微笑ましく思っているが

方や連続失血事件の容疑者、もう一方は猟奇食人鬼。知ってしまったら笑っていられなくなる。

「こちいらのデイベアいくらあですかあ？」

「税込みで1048円になります」

……まあファンシーショップでテディベアを買っているのが猟奇食人鬼だとは誰も  
思うまい。

「このあとどうします刃食くん？」

「なにいかたべえたあいいい、ヒミコ？」

「人以外で！」

「それえはよるにいたべるよおお」

このあと何を食べようかと話す2人。

「じゃステーキ (B o o o o m !! ? !! ?)」

突如の爆発音。

「なんです?」

「あつちいだね、み、みにいってみよようか」

2人はその爆発音のした方へ歩いて行つた。

そこではヘドロのようなヴィランが1人の少年に纏わりついて少年は手から爆発させる個性のようでそれで抗っていた。

が野次馬が邪魔で背が高めの喰ヶ崎刃食には見えてるがトガヒミコにはそれが見えない。

「すぐおいこせえいだあ、たべてみたあいねええ」

「見えないです。刃食くん！」

「なあにい？」

「背中貸してください！」

そう言うのと背中をよじ登り勝手におぶさるトガヒミコ。

「あ、よく見えます！」

「そりやあねえ」

本人たちは気にしていないが

何処からか「あのヘドロに巻き込まれて一緒に爆発しろ」と怨念のこもった声がする。

「刃食くん背が高くていいですね！」

「いちいおう22さいだからあ」

その後1人の少年がヒーローの制止を聞かず助けようとして攻撃されそうになったところNo.1ヒーローオールマイトが出てきて腕一本でヴィランを倒した。

「すごおいなあオールマイト。でもまあえよりよわわくなってえるかあなああ」

「ね、このままおんぶされてもいいですか？」

「いいいよう、ええ、とステエキだっけえ？たべたあいのお」

「はい！」

「じゃああお、おいしいいおみいせあつちいにあるかあらいこおかあ」

「やったあ！」

そのような会話をしたあと2人はその場を去った。

「あの青年……まさか」

こ  
う  
え  
え  
ん

夏。

それは熱気と活気の季節。

身体を動かすことの多い時期。

だが、

その熱にやられて動けなくなるものもいる。

「あ、あ、ああついいいいよおおおお」

喰ヶ崎刃食もそのうちの一人。

彼は暑いのが苦手で捕食数も月5人から3人に下がるほどだ。

しかも彼は全国に幾つかの隠れ家を持っているがその大半が空調設備がないのである。

「さ、さんぽど、どこおにしょよ…」

暑いと言いつつ日課の散歩はする様子。

「そ、だち、ちかくにうみがああつたあはずう、そお、こいこおおおお」

「ゆううがあたでもあついいいいいい」

午後4時

まだ暗くはないが 人の活気もおさまってくる頃。  
喰ヶ崎は近くの多古場海浜公園に足を運んでいた。

「だらしないですよ刃食くん！」

「でもおお」

トガヒミコを連れて。

「ここきたあないねええ」

「そうですか？ 前来たことあるんですけどその時より綺麗です！」

「へええ」

多古場海浜公園は漂着物が多くそこに不法投棄が合わさりゴミ溜めになっていたのだが

オールマイトと緑谷少年のボランティア活動兼修行によつて着々とその成果を出していた。

「およぎいたあいねえ」

「けど水着ありません！」

……この二人には関係ない話だったが。

「どおする、み、みずうでもかけあうう？」

「水着ないけどそれならいいですね！」

「うん、すずうめるだろうしいねえ」

と言うと2人は仲良く水をかけ合い始めた。

「やー！」

「そおおれ」

「んー、それー！」

とても仲睦まじい光景だ。

「ビチヨビチヨです！」

「まああ、あんだあけえやれえばねええ」

1時間ほど水をかけ合った2人は頭から足の先まで濡れていた。

「困りました。これでは電車に乗れません！」

「んんー」

ヒミコが困った風に言う。と刃食は顔に手を当て思案する。

そして閃く

「じ、じゃあちかあくに、ぼおくのかくうれがあがあるうからよつてくう？」

「え、いいんですか？」

∴ 周りから見れば『お持ち帰り』をしてるように見えるのだが幸い周りに人がいないのであらぬ疑いはかけられない。

まあ、どちらも「その気」はないのだが。

「ゆうしよくうはつくるうかあなああ。なあにをおヒミコはたあべたああい？」

「何が作れます？」

「いえにいいあるものおだあとひやしちゅううか、かなあ」

「冷やし中華！じゃ、それで！」

「わかあったあよ」

2人仲良く夕食のことを話しながら歩く。

どちらも危険人物だということを忘れてしまいそうだ。

「まず、いいえにいいいたらさきにいシャワアああびなよ」

「え、刃食は浴びなくて大丈夫ですか？ご飯作るんですよね？」

「シャワアはふたあつあるうんだあ」

「なら一緒に入る心配はないですね！」

「ふふふ、ふくもきてなあいやつがあるうからあ、かわわくまあでそおれきてえて」

「はーい！」

ほしよく

「いやあああああ!!？」

夜。

町の喧騒ではなく

闇の中に響く悲鳴。

「にいげなあいで、よよおおお」

喰ヶ崎刃食、カニバルの捕食の時間。

襲われてるのは女性。

運悪くカニバルに目をつけられ1人になったところを襲われてしまった可哀想な被害者。

「つきやー！」

「ふうひゆるうふふふふふ」

カニバルに襲われて気が滅入っていたのか女性は転んでしまう。

「ああ、いや……いやっ!!？」

「ふふふゆ、うお、おいし、そおおだねええ」

一歩

一歩

カニバルは女性に近づく。

焦ることもなくじっくりゆっくり相手を焦らしながら歩いて行く。

カニバルは人を食べるのが好きだが人を𪔐るのも彼の趣味である。

「……………こん、な…ところで……………」

「んんむう？」

「死にたく……………ない!!？」

「!!？」

熱。

カニバルはそれを感じた瞬間、炎に飲み込まれた。

「はあ……はあ……くっ……」

この女性

個性『爆炎』の持ち主である。

『爆炎』は右手から圧倒的な炎を出せる個性である。

「……くう……」

熱と煙幕の中

女性是先ほどのヴィランを倒せたと思いきを抜いてしまっていた。

……だが

「…………ふう」

カニバルはそこにいた

平然と

無傷で。

「っ  
!!？」

女性もこれには驚いた。

最悪気を失ったと思っていた相手が何の気なしに立っていたのだ。

「ふうふうひゅゆううう、あまりおいしくなあいなあ」

「なら……もう一度!!?」

もう一度。

女性の掌から炎が生まれカニバルに向かって進んで行く。

だがそれは先ほどのようにはいかなかった。

シャク……シャク……

「えっ」

炎はカニバルの口に吸い込まれた。

不自然な咀嚼音とともに。

「げっぶ、あ、あんまありおいしくないんだあて、それええ」

「う、嘘……なんで………」

「さつきはひいつくりいいしちやあつてさいしよおからあたべれえなかつたあだけえ  
さああ」

無慈悲。

まさにその通りであつた。

女性がうまくいったと思つたのはたまたまだつたのだ。

「もおお、いいいよねええ？ ぼくうがまあんできなあいよおお」

「ひっ!!?」

恐怖。

どうにもできない圧倒的な自分の死の予感。

それは時間が進むにつれ濃厚になってゆく。

ばきり

「えっ」

女性はその音が最初何の音かわからなかった。

ましてや自分の脚が踏み砕かれた音だとは思ひもしなかった。

「ひつぐうあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!？」

「まあずう、にげられえないよおにいい」

脚は赤黒く変形し血と骨を露出させていた。

女性はいまの痛みに叫び転がる。

「つぎはそれお、てええええ」

カニバルはそう言うとき女性の右手首を手に取り

捻り始めた。

「ひぎいい!!?や、やめてやめてやめて!!?!!?」

しかしやめない。

どんどん捻る。

そして

ぎきつ

「い い い い い い い い い い？」

「ふあああはああああ」

鈍い音がしたあとに女性の右手首はだらんと垂れる。

「もう……やめて……なん……でも……するから」

痛みと恐怖に心折られた女性は目が虚ろながらも助けを求める。

「じゃああ、せめてえもおまあずくうならなあいでえねえ」

だが願いは聞き入れられなかった。

「そおの、や、やらかあそおなおなかあからあああ」

「あ、ああ……あ……人生短かったなあ……」

「いただきます」

翌日、

雄英高校入試日。

# にゅうかあい

「おい、本当にこいつを誘うのか？」

「ええ、それが先生からの意向です」

「こつちを襲わないか？それが不安だ…」

「大丈夫でしょう。一応交渉材料はあります」

「…まあ、いい。頼んだぞ」

「はい。任せてください」

「  
〓  
」

日が傾き沈み始める夕方。

喰ヶ崎刃食はいつもの散歩兼買い物を楽しんでいた。

ヴィランになつてほぼ2年。

彼の生活スタイルは基本変わらぬものとなっていた。

今日もいつも通りの日常であつた

かに思われた。

「?」

刃食が裏路地に入ると同時に彼の目の前に黒い靄のようなものが現れる。

それは瞬く間に広がり人一人分の大きさになり

「カニバル様、お迎えに参りました」

黒靄の人型に変化した。

「……だあれ？」

「失礼しました。私『ヴィラン連合』の黒霧と申します」

黒霧と名乗る靄は次第に形がハッキリ見えるようになり  
やがてスーツを纏う姿を現わす。

「なあんのよよおお？これえからあごおはあんたべえるんだあけどお」

「ここでは聴かれる可能性があります。ですので場所を移動します。お食事はこちらで  
用意させていただきますので」

刃食は自分の楽しみである食事が邪魔されるのではないかと少しイラついたがそれ  
を用意してもらえると聞いて内心嬉しかった。

「そおれならあ、いいいよお」

「では…いきますよ」

黒霧はそう言うのと両腕を上げ黒い靄である手を刃食に向ける。そして刃食にその黒い靄が向かつてゆき体を包み込むように蠢く。

「おおお？」

「そのまま動かないでください。転送しますので」

黒霧の言葉を聞くと同時に刃食は目の前が真っ黒に染まる。

しばらくすると若干の浮遊感の後にしっかりと足が着地した。

そして目の前の靄が晴れると先ほどの裏路地とは全く違うバーのような場所に移動していた。

「おおおー」

刃食も珍しい事を体験できたのを素直に驚きキヨロキヨロと辺りを見回す。

「やあ。先輩」

刃食はその声にふと現実にもどる。

刃食の目の前には全身を黒で統一した服装で顔に『手』を着けている男がいた。

「せえんばいい？ ぽおくにいはあこうはあいいなあいけどお」

「いや、まあ。ヴィランとしての先輩って意味さ」

刃食は純粋に自身に先輩と慕っている人がいない事を言うが『手』の男はそれに呆れたように応える。

「まあそんなことは重要じゃない」

『手』の男は刃食に数歩近寄る。

「自己紹介だ。俺は死柄木弔。よろしく」

『手』の男、死柄木弔はそう言う刃食に握手を求める。

「……ぼおくはカニバアルだよ」

しかし刃食はこの男を警戒し握手に応じない。

「……なるほど。警戒心は高いね」

死柄木弔はそう呟くと手を引っ込め踵を返しカウンター席に座る。

「単刀直入に言いましょう」

いきなり語りかけた黒霧はいつの間にかカウンターに立っていて何やらカクテルを作っている。

「カニバル。貴方を『ヴィラン連合』に歓迎します」

しようげえき

「かんげえ？なんでえ」

少し間の抜けた返事。

刃食はなぜそんなに歓迎されるのか分からなかった。

「なに簡単な話さ」

カウンター席からこちらに体を向ける死柄木弔は少し嘲笑するように喋る。

「俺たち『ヴィラン連合』はヒーロー社会の壊滅が目的だ」

顔に着けてる『手』の隙間から死柄木の目が見える。その目は笑いながらも悪意のあ

る目であつた。

「今度、その一步としてヒーローの名門校『雄英高校』を襲撃する」

「！」

雄英……それはヒーロー科のある高等学校の中で最難関。そのことは刃食でも知っている。

ちなみに関西にもその雄英と並ぶ士傑高校というのがあり「東の雄英」「西の士傑」と言われるほどである。

「……しけえつはしいなあいいの？」

「ああ？まあ士傑は『ターゲット』がないからな」

刃食の質問に軽く苛立つた死柄木は首をボリボリと搔く。

「なぜ雄英を狙うかと言いますとね、オールマイトが教師をするからですよ」

死柄木の代わりに黒霧が刃食の質問に応える。

黒霧はできたカクテルを死柄木に渡しながら話を続ける。

「まず雄英を襲撃するにあたってその理由はオールマイトの殺害。これが第1目標です」

黒霧はカクテルを渡し終えるときちつとした所作で刃食に向き直る。

「そして次に雄英の生徒の皆殺し。これはまあ副産物です」

黒霧が言い終わると死柄木はカクテルを片手に刃食に言う。

「そこであんたに暴れて欲しいのさ」

彼の顔は『手』ではつきり見えないが端から見える口元はニヤけている。

「…なあるうほどおお。やありたあいこおとが、よよおおくわかつたあよお」

刃食は話を聞き終わると両手を組みウンウンと頷く仕草をする。

「でも、ぼおくにいめりつとがなあいよねえ」

だが刃食はカツと目を見開き黒霧と死柄木を睨む。

自分に利のないことはやりたくないのだ。

「……チツ。やつぱりただじゃ無理か」

「……はやはり……」

黒霧と死柄木が顔を向けあいなにやらヒソヒソと少し話すと黒霧が

「カニバル。失礼しました。やはりなにかしらモノは欲しいですよね」

と既に言うのが決まっていたかのように話しかけた。

「この襲撃。実は他にも協力者達がいましてね。まあ、協力者といってもそこらにいるチンピラ共なのですが」

黒霧はまたカクテルを作り始める。

「そこで交渉です」

指をピンと立てる動作をして（靄なのではつきり見えない）黒霧はこう言い放った。

「そのチンピラ共と雄英の生徒。食べて良いですよ」

その言葉は刃食にとって衝撃だった。

今まで刃食も沢山のヴィランに協力を求められたりしたが何時も食べては駄目だと

言われておりその度にそのヴィランの頭を丸齧りにしていた。  
だが今回は違った。

「……いいの？」

「ええ。いくらでも」

「ほんとにいい？」

「はい。仕事はしてもらいますが」

「……………」

歓喜、感激。刃食にそれらが巡り廻る。

「いいいやったああああ!!? はあいるよ! 『ヴィラン連合』 おおおお!!?!!?!!?」

こうして喰ヶ崎刃食はヴィラン連合に加入した。

「ほら先生の言った通り」

「……………まじかよ」

このことに死柄木は少し驚いていた。

# しゅうげえき

国立雄英高等学校。

ヒーロー科最難関。

そんな所をどうやって襲撃するのか。

とても簡単。

まず雄英に潜入。

そして授業のカリキュラムを調べる。

外部に出る授業を見つける。

あとはそこを襲撃するだけ。

な？簡単だろう。

もう既に潜入とカリキュラムは調べ終わった。

調べによれば近々、USJなる場所で救助訓練を行う模様。さらにそこには様々な災害を再現したゾーンがあるとの事。これを使わない手はない。

協力者を募集して集まったチンピラ共に個性と得意な場所を聞きそこに配備する。雄英の生徒共は個性が未確定なためチンピラ共を配備したところにバラけさせる。

これの殆どを1人で出来るのヴィラン連合の強みだ。

生徒をバラけさせたら本命であるオールマイトをリンチする。先生によれば弱っているらしいがそれでもno.1ヒーロー。衰えを感じさせない。そこで先生はある奴をくれた。

脳無。

こいつはすごい。なんとオールマイト並みのパワーが個性なしで使えさらにシヨツク吸収、超再生がついてる。

これならあの平和の象徴も殺せる。

だけど不安要素がある。

雄英潜入前に勧誘したカニバルというキチガイ。

正直こいつは理解不能だ。

食人鬼らしいが詳しいことは知らない。

先生もなんでこんな奴を勧誘しろと言ったのか……

まあ聞いた話によるとだいたい戦力にはなるがそれでもこちらに敵対しないとも言いきれない。

ま、俺はオールマイトを殺せたらそれでいい。

多古場市。

とある倉庫。

そこにはなんと200人以上のヴィラン、チンピラ達が集まっていた。皆何かを待つようにそわそわしている。

「おい、あいつらはまだなのか！」

1人の男がイラつきヤジを飛ばし始める。

「落ち着けよ、お前。あの人達にそんな反抗的な態度知られたらどうなることやら」  
別の男がイラついてる男を宥めるが……

「うるせえ！あいつらむこうから集合かけたのにぜんぜんきやしねえ!!？」  
さらにヒートアップしてしまった。

だがそれ以上の言葉は

「カニバル。あいつ食べていいぞ」

「いいいの？やあつたああ」

その声とともに消え去ってしまった。

「えっ」

「いただきます」

がぶり

先ほどまで罵声を上げていた男は頭の上半分の消失とともに息絶えた。

「うわっ」「ひいいい！」

血を撒き散らしながら倒れる男の死体。周りのヴィラン達もそれに対して悲鳴をあげる。

そして死んだ男のそばに4人のヴィランが立っていた。

1人は全身に『手』をつけた細い男、死柄木。

1人はスーツを見に纏う黒霧の男、黒霧。

1人は筋骨隆々で脳が丸見えの男、脳無。

そしてもう1人は――

「おい、あいつカニバルじゃねえか！」

鮮血の如き赤を着こなす黒髪の男、カニバル。

彼の口からは先ほどの男の血と白く輝く牙が見えている。

「おいおい、まだ5分しか遅れてないのに酷いようだなあ」

「おおくれえたのきみがあねぼおとしたかあらだあけえどねえええ」

「うるさいだまれ！」

死柄木とカニバルは男を殺したにもかかわらずへらへらと話している。

「チツまあ今の俺は上機嫌だからこれだけで許してやる」

死柄木は男の死体に近寄り踏みつける。

「お前ら、いいか。これから俺たちは雄英を襲撃する。あの雄英だぞ！それなのに浮かれててどーする？そんなんじやオールマイトを殺せない！」

死柄木の演説。

大半のヴィランは（お前さつき寝坊したって言われてただろ！）と心の中でツツコミ

を入れていた。

「黒霧、ゲートを開けろ。さっさとゲームを始めよう」

「ええ。もう開いています」

死柄木が語りかける前に黒霧は黒霧を広げていた。

「この向こうはあの雄英だ。たとえ生徒とはいえ気を抜くなよ」

ヴィラン連合、襲撃開始。

てえき

「退がつてろ！あれはヴィランだ!!？一かたまりになれ！」

突然だった。

USJに書いて13号が話終わったらすぐ生徒達に訓練させるはずが広場にヴィラン共が現れた。

おそらくテレポーターの個性がいるな：

全く生徒の授業を潰すなんて合理的じゃない奴らだ。

見た限り殆どの奴らはチンピラ共だ？

だがあの『手』の男と脳味噌野郎：あいつらは別格だな。

「…おかしいな。この前貰ったカリキュラムじゃオールマイトがいるはずなんだが…」

「そのせいで警戒されているんじゃないですか？ほらイレイザーヘッドがおりますし」

やはりあの騒動はヴィランのせいだったか…

目的はなんだ？

「……？おいカニバルはどうした？」

「おや？ちよつと見てみますね」

？なんだ？ここからじゃよく聞こえん。

少しぎわついているみたいだが……

「……どうやら先ほどの死体を少し食べてたようで」

「…ほんとフリーダムだな」

どうやらまだ何かをいるみたいだな。  
どんな奴か……

「おい、ちゃんと着いてこいよ」

「ごめえんねええ。ちよおつとこばらあがすいてねええ」

!!?

おい、まじでか……!

なんであいつがここに……!!?

カニバル!!!

「ヴィランンンン!!?まじでかよ!!?」

そう衝撃だった。

まさか雄英にヴィランが乗り込んでくるとは誰も思わなかった。

相澤先生はみんなに一かたまりになれと指示をした後ヴィランを睨みつけてうごな  
かくなった。

「ふざけんな……!なんであいつが……!!?」

そう先生が呟くのを僕は聞いてしまった。まるでいて欲しくない奴がいたかのよう  
に……

「13号!生徒を護れ!!?」

「えっしかし先輩!」

「ここは俺が食い止める!!?」

「どうしたんですか先輩!!?」

「特殊対策ヴィラン【C】が来やがった!!!」

「!!?」

相澤先生は13号先生にそう言い放つとヴィランに向かって行った。というか特殊対策ヴィラン?確かオールマイトが言っていたヒーローのみに公開されるヴィランだっけ?基本メディア公開されない……

「生徒の皆さん!ここを離れますよ!!?」

13号先生も鬼気迫る様子で生徒の誘導を始める。

「先生え!どうしたんですか!!?」

「それは後で話します！今はとにかく逃げなければ…」

「そうはさせませんよ」

「!!?」

13号先生が避難させようとすると目の前に黒い靄のようなヴィランが現れる。

「せっかく高い戦力を仲間にしたのですからちゃんと味わってもらいますよ」  
「くそっ」

13号先生は黒靄に対して吸い込もうと指先の蓋をあけるが

「オラア！」

「死ねえ！」

2人のクラスメイト、切島くんとかっちゃんが前に出て攻撃をしたため吸い込めな

かった。

「ちつ避けたかクソが!!？」

しかしその攻撃は効果がなかった。

「おやおや、最近の子供は血氣盛んですね」

「ああん!!？」

「おお、怖い怖い」

そのヴィランは嘲笑するように体を揺らす。

「とりあえず實力不明の子供たちは…」

ヴィランはそう言った瞬間に僕の周りを黒靄で囲った。

「散らして捌り殺す!!？」

その声を聞いた次には目の前は真っ黒になり  
晴れたら目の前に水が迫っていた。

せんとおお

「そこらへんの対策は、してある！」ガスッ

「ぶべえー！」

ここら辺のヴィラン共はやはりチンピラ程度だな。これぐらいであれば体力ある内に全員倒せるが……問題はあいつだ。

カニバル。特殊対策ヴィラン【C】。

俺が相手してきたどのヴィランよりも厄介かつ危険な奴。

今はまだ動いていないがもしあいつが生徒や俺を襲ったら……考えたくもない。

「……」ソワソワ

「どうしたカニバル。ソワソワして」

「もおお、じゅゆうにいやつていいんだよねええ？」

「……ああ、好きにしろ」

「やあつたあ」シュバツ

！

クソツ。

そんなこと考えてたら本当にこっちに来やがった！

「ひさあしぶうりいい、イレエイザアアヘッドオオ」

「…」

このやろう楽しみやがつて…！

こいつには俺の個性と捕縛布は効かねえ…

本当に相性が悪い!!?

「オラア！」 シュ

「おつとお」 ひよい

「ウラア!!?’ シュ

「ほいい」 ドスツ

「ぐふっ！」

こいつ…俺の蹴りに合わせて鳩尾に入れやがった…!

「そおれえ」 シュバツ

「うをお！」 サツ

そしてなんつー蹴り!

鋭いってもんじゃない…!

こいつは戦えば戦うほど強くなりやがる…

本当にバケモンだ……!!？

特殊対策ヴィラン

先輩はそいつが来たと言ってヴィランたちに突っ込んで行ってしまった。

特殊対策ヴィランはその事件の凄惨性及び数多の犠牲者を出したヴィランの事。  
オールマイト以前にはたくさんの特特殊対策ヴィランがいたそうだが今は減少した。  
だが減少してもその脅威は無くならない。

カニバル。

以前先輩と戦ったことのあるヴィラン。

先輩が「もう戦いたくない」と言うレベルの危険性。

話によればあのオールマイトでさえ取り逃がしているようだし…

とにかくこのことを学校に知らせなくては！

さつき生徒が前に出ていたため吸い込めず他の生徒がどこかに飛ばされてしまった  
…もつとちゃんと指示していれば…！

「飯田くん！」

「！は、はい！」

「あなたはこれから個性を使って学校に戻ってください！そして先生方を呼んでください！！？」

「なっ？！私にはクラス委員としてここでの義務が…」

「ヴィランがここに襲撃しているのにも関わらず警報が鳴らない…すなわち電波を妨害する個性のヴィランがいるとみていい！だとすればあなたの個性で先生方を呼んでき  
た方が良いでしょう！お願いします！」

ヴィランの目的はまだはつきりしない。

「ここは頼むしかない…！」

「……わかりました。この飯田天哉に任せたださい！」

「敵の前でペチャクチャと……そうはいきませんよ！！？」

ヴィランが飯田くんに向かって迫っていく…

「させません!!?」

私の個性で相手を吸い込む。

頼みますよ…飯田くん!!?

きいき

殴り殴られ

蹴り蹴られ

ヒーロー『イレイザーヘッド』とヴィラン『カニバル』の闘争は苛烈であった。その苛烈さたるや他のヴィラン、死柄木でさえも介入できないほどであった。だがそれはそれほど長くは続かなかった。

「ぐふうっ」

イレイザーヘッドの腹部にカニバルの足刀蹴りが刺さる。元々体力の無いイレイザーヘッドには長期戦はキツかったのだ。

「やったあ」

「ま…まだまだあ！」

口では強く保つても動きは鈍る。

「ほいつとお」

「ぐお」

カニバルの足払い。そして…

「らああー！」

カニバル全力の頭部への鉄槌打ち。

「があっ!!？」

頭を床に打ち付ける。

その威力たるや頭が打ち付けられた衝撃で下のタイルが碎けるほどであった。これにはイレイザーヘッドも堪えてしまい意識が朦朧としている。

「ふうふうん」

満足気にかニバルはイレイザーヘッドを見下ろす。

そして脇腹に強力なサッカーボールキック。

「いっつはあゝっ」

口から血を吹き出し意識を無理やり覚醒させられたイレイザーヘッド。

ここまで肋骨3本骨折。その内1本は粉碎骨折。鼻も折れ頭蓋骨にもヒビが入っている。腕もガードしただけ骨が折れ足も先ほどの足払いで脛を骨折。

対するカニバルは血こそ出てるものの大きな傷は無く擦り傷程度しかなかった。

「たあのしいね、おいしいしそおだあねえイレイザーアヘッドオオ」

そう言いながらカニバルはイレイザーヘッドの腹を踏みつけた。

「ぎ……がああああ!!？」

腹に足がめり込むほど強く強く踏み込む。

バキバキとなつてはいけない音がする。

イレイザーヘッドは血を吐き強く抵抗している。

「ふんふん……いいいかおだあ……」

踏みつけながらカニバルはイレイザーヘッドの顔を覗き込む。

「あたまあのなかでえぜつぽおうといったみたいとくるうしいみがくるくるとまわわつてるうんだあねえ」

カニバルの口から笑みが溢れる。

「『死』はあ『生』にたあいするうさいこおうのおすばいいすだねえ」  
狂気の笑みが。

カニバルは人を食べるのが大好きだが人を蹴るのも大好きなのだ。  
人の苦しむ顔を

人の痛みで歪む顔を

人の絶望した顔を

観るのが大好きなのだ。

たとえどんなヒーローであつても彼にとって苦しめば娯楽対象でしかない。

パツと腹から足を退けるカニバル。

「かつ……はあ……！」

イレイザーヘッドはこのうちに逃げようともがくが……

「まあだ、たりのない」

イレイザーヘッドがもがいてうつ伏せになつた瞬間に頭を踏みつける。

「がぁ……！」

何度も

「ぐぎい……！」

何度も

「……い……っ!!？」

何度も。

辺りに血が飛び散り  
タイルに陥没する頭

「……………」

そしてイレイザーヘッドの反応が消える。  
どくどくと赤い紅い血が流れ出れ  
命が危険であるのは誰でもわかる。

「…あああ、きいえちやあつたあ？」

カニバルは残念そうに呟く。

「まあ、いつかあ」

気を取り直すとカニバルはイレイザーヘッドの傍に座り込みイレイザーヘッドの腕  
を持ち上げた。

「それえじやああ」

カニバルは祈る所作をして…

「いただきます」

腕に

齧りついた。

# いちげえき

その瞬間

周囲は何が起きたのかわからなかった。

傍観していた死柄杓も

齧りついたカニバルも

齧りつかれたイレイザーヘッドも

ただこの場で理解出来てたのは……

カニバルの頬に拳を穿つ

緑谷出久だけであつた。

数分前……

水難ゾーンに飛ばされた緑谷出久は同じく蛙吹梅雨、峰田実とともに見事ヴィランを一網打尽にしていた。

無事……とはいかず作戦で緑谷は左親指と中指が骨折してしまっていたがそれ以外は大きな怪我もなく作戦は大成功であつた。

「あれで全員でよかった……もつと冷静に……念のために何人かいても可笑しくない……ほんと運がよかった……」ブツブツブツブツ

「緑谷ちゃん、怖いからやめて」

緑谷は自身の反省を呟いていると蛙吹に止められる。

「次どうしようかしら？」

「とりあえず助けを呼ぶのがいいかな……このまま水辺に沿って出口に向かうのが最善かな」

これからどうするのか。緑谷はそのことを考えていた。

「先生が広場で敵を引きつけている……でも多すぎる。正直先生はムリをしていると思うんだ」

「えっ？緑谷まさか……」

「ケロ」

緑谷が何を考えていることに蛙吹と峰田は不安を抱く。

「いや邪魔になることは考えてないさ！でも……」

緑谷がなぜそのようなことを考えたか。敵の多さともう一つの理由があったから。

「先生がさつき13号先生に指示を出すとき『特殊対策ヴィラン』って言っていたんだ」「特殊対策ヴィラン？なんだそれ？」

「あまり詳しくないけど……ヒーローにしか情報公開されないヴィランらしいんだ」

これが緑谷の不安の種であった。

「おそらくその『特殊対策ヴィラン』がいるんだと思う」

「はああ!!? ならなおさらやめた方がいいって!!? ぜってーロクな奴じゃねえよ!!?」

緑谷の言葉に峰田が吠える。

「だからこそ先生の負担を減らせたらと思っっているんだ」

「そうね。それにどのみち広場を通らないと出口に行けないもの」

しかし2人によつて峰田は鎮められてしまった。

「つゝゝゝ! お、俺は危なくなったら逃げるからな!!?」

「僕もそのつもりだよ。あまりに危険だったら隠れて出口に向かう」

峰田をなだめ緑谷一行は広場へ向かう。

緑谷は先ほどの作戦がうまくいったために自身の力がヴィランに通用したと過信していたのだ。特殊対策ヴィランもなにか手伝えるのではないかと。

でもその自信は打ち砕かれた

視界に映るのは相澤先生、イレイザーヘッドが一方的に嬲られてる様子によつて。

「……………なつ……………」

声は出なかった。

あの先生が、プロヒーローである彼が手も足も出ずにボロボロにされてる。それだけでいっぱいだった。

「嘘だろ……………先生が……………」

他の2人もそうだった。

無理しているとわかってても自分たちより強い先生だ。そう易々とやられる訳がない。そう思っていた。

「……………あれじゃ……………先生が危険だわ」

蛙吹は明らかに命の危機が迫る先生を見て悲しげに呟く。

「おい緑谷あ……………あれでも先生を救けるのか……………?」

峰田の絞り出したかのような声を出す。

「救りたい……………だけどあの様子だと救けたらこつちも先生も危ない……………」

緑谷は先生を蹴る男を見つめる。あの男が『特殊対策ヴィラン』だ。そう確信していた。

遠目から見てもわかる邪悪さ。肌に感じるピリピリとした狂気。只者ではない。

「だけどあのヴィランは先生しか見えてないみたい……だからそこを突けば……」

だが緑谷は感じた。周りにもヴィランがいるにもかかわらず注意を先生だけに向けているように……

「はあああ!!? バカお前あんなの隙なんてあるわけねーじゃん! 頭冷やせ!!?」

「ケロ。そうよ緑谷ちゃん。それは峰田ちゃんに賛成よ」

しかし緑谷の案は2人に却下される。あまりに無謀と。

「で、でも……!」

緑谷もその無謀さには気づいていた。だが彼の心の奥底にあるヒーローとしての素質が見捨ててなくなかった。

「むしろ早く出口に行つて助けを呼んだ方がいいわ」

「そうだな! そうしよう!!?」

だけど2人の猛反対には抗えなかった。緑谷は理性で救いたい気持ちを抑え込んだ。

「……分かったよ」

こうして一行は出口に隠れて向かって行つたのであつた。

その時緑谷は何かを感じた。

ふと先生の方へ振り向くと先ほどまで先生を嬲っていたヴィランが先生の傍に屈んでいた。

そして先生の腕を持ち上げ祈る所作をした。

緑谷にはこれから起こることが恐ろしく思えた。

ヴィランは先生の腕に齧りついた。

「……蛙吹さん……」

「？」

「ごめん!!？」

「!!？」

緑谷は飛び出した。

右足にワン・フォー・オールを発動しヴィランに向かって行く。

蛙吹や峰田が止められるはずもなく2人は驚愕した。

まるで時がゆっくり進んでいるかのように頭だけが今の状況を理解していた。

（僕はバカか!!？なんで飛び出したんだ!!？無理だとわかってそれでいて納得しただろ!!？ああもう取り返しがつかない!!？）

足は折れてはいるが必死ゆえに痛みに気づかない。

どんどんどんどんヴィランに近づく。

(もう…決めてやる!!?)

覚悟を決め緑谷は緑谷は右手に力を溜める。

(卵が割れないイメージ!!?)

あと1メートル。

(今だ!!?!?!?)

「S M A A A A S H ! ! ! ! !」

ヴィラン、カニバルの頬に緑谷の一撃が決まる。

そしてこれが緑谷が初めて力の調節ができた瞬間でもあった。

きょううふ

緑谷出久というヒーロー志望の生徒から一撃をくらったカニバルはその威力により5 m?ほど吹っ飛び、ゴロゴロと二、三回転がったらうつ伏せになって止まった。

「なっ……はあ!!?」

カニバルのイレイザーヘッド廻りを観ていた取り巻きヴィラン達はあまりの驚きに固まる。

自分たちでさえ手を出したら危険な奴が1人のガキにぶっ飛ばされた。

「なんだあいつやべえ!!?」

「嘘だろまじかよ!!?カニバルがぶっ飛ばされたあ!!?」

その事実には慌てふためくヴィラン達。

あるものは逃げ出しあるものは放心する。

それだけの衝撃であるようだ。

「お前らまちやがれ！」

突然の怒声。ヴィランたちは静かになる。

その声の主は死柄木であった。

「あのガキをよくみる！どうやら動けないらしい！」

そのことにヴィランたちは気付く。右足があらぬ方向に曲がっているのが見てとれる。

「へ、へへ。なんだよ脅かすなよ。もう動けないんじゃないか」

「ひひひ、こりやいいサンドバックだ」

「カニバルがいるだけでストレスだからな……たんまり鬱憤ハラさせてもらうぜえ」

ヴィランたちは目の色を変え緑谷にじりじりと迫ってゆく。

（くそつ。やつぱり折れた！でも腕は無事だ!!？これならなんとかいけるかもしれない  
!!!）

緑谷は自分の置かれている状況を冷静に分析していた。先ほど放ったSMASHは右手を骨折させず無事である。

突如、緑谷は何かにつ張られた。それはヴィランの仕業かと緑谷は一瞬勘ぐったが

それは違った。

「あ、蛙吹さんっ!!!」

「つかまつて緑谷ちゃん」

蛙吹の舌によつて緑谷は引き寄せられる。それに乗じてイレイザーヘッド、相澤先生を抱き抱え窮地を脱する。

「さつきはごめん!!僕……」

「今はいいわ緑谷ちゃん。とにかく逃げるわよ。頼むわ峰田ちゃん」

「お、おう!!?まかせろお!!?」

蛙吹は緑谷を引き寄せると緑谷と峰田、相澤先生を腕と舌で抱え跳躍した。

「まちやがれえ!!?」

ヴィランたちは逃がすものと駆け寄ってくる。

「これでもくらええ!!!」

峰田はヴィランたちに向けて個性である頭部の球体を投げつける。

「うおお!!?なんだこれ!!?」

「やべっ足についたあ!!?」

興奮し追いかけてきていたヴィランの手や足にその球体がかくつ付く。それを取ろうと別の手で触りまたくつ付く悪循環に陥っている。

「はっはぁーっ!!? くらいやがれえ!!?」

「さすがね、峰田ちゃん」

「あ、蛙吹さん大丈夫? 重くない?」

「梅雨ちゃんと呼んで。このくらいは大丈夫よ。私も鍛えてるから」

「は、ははは…」

死柄木はイラついていた。

先ほどまでヒーローの公開処刑を観ていたはずなのにガキに水を差されいい気分を害された。

ぶっ殺せ。

これだけヴィランがいればガキなんぞ簡単に片付けられると思っていた。

しかし今の状況はどうだろう？  
たかが3人のガキにしてやられてる。

「クソが……っ!!？」

自分の思い通りにゲームが進まない。  
自分の中にヘイトが溜まってゆくのがわかる。

「……………死柄木」

「何の用だ黒霧い……！」

死柄木のもとに黒い靄の黒霧が現れる。  
とても疲弊しているように見える。

「生徒の……1人に……に、逃げられました……」

その一言は死柄木を激昂させた。

「なんだと黒霧!!? お前は何をやっているんだ!!? 逃走の妨害は任せろと言ってたじゃないか!!」

「す、すみません…」

「謝ってすむならヴィランやるな!!? ただでさえあのガキ共でイラついているのに……!!!」

ガリガリと死柄木は首筋を掻きむしる。若干の血が指に付く。

「ああ……ゲームオーバーだ! でも帰る前にあのガキ共をぶつ殺す!!? 脳無!!? やるぞ!!?」

子供のように死柄木は苛立ちを露わにしていた。  
脳無を引き連れ死柄木は3人に向かって行く。

その時だった。

その場にとてつもない重圧がのしかかった。

ベテランヒーローが出すような威圧ではない。

おどろおどろしい。脊椎でヒルが駆け巡るような、皮の内側から血が減ってゆく錯覚をするプレッシャー。

生き物の原始的恐怖。

それの前には狂気も正気もない。

純全たる捕食。

カニバルが起き上がった。

いかあり

重く重い空気が漂っていた。

その発生源は他でもない、カニバルからだった。

彼はただ立っていた。

そう立っているだけ。

それだけなのである。

なのにこれほどまでの喉につかえるかのような空気。

「お、おいカニバル大丈夫か…？」

カニバル付近にいたヴィランが語りかける。

一応この襲撃において首謀者と一緒にいたことと危険度によって自分より目上としている。

普通のヴィランであればそれとなく返事をするであろう。

だが彼の話しかけた相手は超がいくつついても足りないほどの危険人物、カニバル。

ガリッ

ほんの少し近づいただけで

そのヴィランの顔がなくなった。

ドサツと崩れるように倒れる顔のなくなったヴィラン。

「っひ、ひいいい!!?」

1人のヴィランがその場あら逃げ出す

たがなぜか転んでしまう。

なぜか?

恐る恐る自身の足を見るヴィラン。  
そして気付く。

自身の両足のアキレス腱が挟れていることに。

「ひっぎやああああ  
!!!?」

断末魔。

その声は助けを求めている。

だが誰も助けない。

誰も助けられない。

カニバルはその叫ぶヴィランに

ひたひたと近づいた。

叫ぶヴィランはそれに気づかない。

気づいたときは

カニバルの足が自分の頭に乗った時だった。

バチユツ

振り向く暇もなく

一つの塊は

赤い花を咲かせた。

この時、周りはカニバルの顔を見た。  
見てしまった。

チンピラも

死柄木も

逃げるはずだった緑谷たちも

全員見てしまった。

闇

暗く底の見えない闇

それがあつた。

見えない見たくもないものが見えてしまう。

皆が恐怖した。

こんな底の見えない奴が  
人間でいていいはずがない。  
人間でいていいわけない。

全てを飲み込む  
全てを喰らい尽くさんとする闇。

人間ですら喰らうモノは  
人間ですらない。

ヴィランを踏み潰したカニバルはしばらく動かなかった。  
周りも動けなかった。

動いたら次の獲物になってしまう。

そうなるのがわかるから。

突如、カニバルが動きだした。

周りは身構えるが

襲つてはこない。

先ほど緑谷に殴られた頬をさすると

口の中に指を突っ込んだ。

何事か、と周りは警戒する。

しばらくすると口の中から何かを取り出した。

歯

歯だった。

カニバルの歯。

殴られた時に折れたのだ。

ジツと自身の歯を見つめるカニバル。

「……………ふふ、ふ」

笑い声

カニバルの声が静かな場に響く。

「ふ、ふ、ふふふふうふはふふふうう、  
すごいすごいねええ」

カニバルは喜ばしように語りだす。

「ぼおくの『は』をお、お、おるなあんてえねえ」

そのことがすごいことかのようにカニバルは折つたことを誉めた。

緑谷はなぜなのか理解できない。

「ふふふう、ひひ……でもおねえ、きみはあやつあいけないいこおとをしたああんだ」

空気が変わる。

先ほどの重く気持ちの悪い圧力が緑谷たちに圧力がかかる。

「ひとおのじやあまはしちやああいけなあいよねえ？」

カニバルは緑谷たちに顔を向けた。

笑顔であつた。

闇が含まれた笑顔であつた。

「そおんなこおとするなあんてええ

やられる覚悟はあるんだろうな」

次の瞬間

緑谷に

カニバルの

蹴りが入った。

## 廻り

カニバルに蹴られ

高く高く緑谷は舞い上がった。

何が起きたのか

何をされたのか

その時緑谷には分からなかった

或るのは腹部を突き刺す鈍痛

荒ぶる視界に映る足を振り上げたヴィラン、カニバル

そうして漸く自分が蹴られたのだと緑谷は理解できた。

「……………き……………!が……………あ!!?」

息が吸えず吐けず

口を切ったか胃をやられたか血の味がする

目はチカチカと霞み

脳には「危険」の信号。

浮遊感は終わり

落下し空気を全身で斬る。

近く地面

眼前に迫るは自身を蹴り上げた力ニバル

動くことなく佇む姿は次が或ると緑谷は感じた。

3 m

緑谷は打開策を考える

2 m

反撃するか受け止めるか

l m

どちらも「不可能」のイメージ

そして…

ボツ

先程カニバルに一撃決めた緑谷の様に  
今度はカニバルの拳が緑谷の頬を穿つ。  
その音は拳が空を斬る音ではなかった。  
まるで圧縮した空気が一瞬で爆発したかの様な  
破裂音。



言葉の羅列に聞こえる笑い声。

カニバルは起き上がりとしてゐる緑谷に歩み寄っている。  
悠然と

優雅さまでも滲ませながら  
ただ歩いている。

「はは、凄いねえ、君。結構強めだったのに」

カニバルの普段を知っている者は耳を疑う程の流暢な喋り。  
異常だという事がわかる。

「倍返し……」

頬を緩ませ

楽しそうな声色で

カニバルは喋る。

「そう、倍返しさ。さっきの蹴りも頬を殴ったのも君が僕を殴った分の倍返しなのさ」

理不尽

周囲の脳裏にその一言が浮かび上がる。

「苦しそうだねー？辛そうだねー？でも君が悪いんだよー。僕の食事を邪魔するなんてねえ。怒りを通り越して頭がスッキリしてるよ」

緑谷に近づくとカニバルは彼の目の前に屈み込んだ。

緑谷が痛みに耐える中カニバルは笑顔を向ける。

「でも未だ足りたいなあ…其れは何でしょう？」

不思議そうに

まるで子供に言い聞かせる様に

カニバルは問う。

「ハンムラビ法典って知ってるよねえ？」

問いにかぶせる問い。

其れは対象を不安にさせるのは容易であつた。

「其れにはこんな一文がある。

『目には目を

齒には齒を』ってね」

口の中に入り込む異物。

緑谷は其れが直ぐにカニバルの指だと理解した。

「僕は齒が折れてるのに君の齒は折れてないんだよ？それってズルくない？」

抵抗しようにも痛みと苦しみによつて体が動かない緑谷。

「じゃあいくよー？せーのッ……」

歯が折られる

その痛みに備えようと緑谷はしたが  
肝心の痛みは来なかった。

其れは何故か？

何故なら………

「皆、怖かっただろう。」

もう大丈夫!!

私が来た  
!!!!  
」

No. <sup>オールマイト</sup>1がその場に現れ

カニバルが標的を替えたのだ。

「……………やっぱ彼を先に食べたいなあ♪」

## 激突

オールマイトは強い。

其れは周知の事実。

ヒーローであつてもヴィランであつても子供であつても皆知っている。

「私が来た!!!」

だからその声を聞けば

生徒は安堵し敵は絶望した。  
ヴィラン

だが死柄木やカニバルは違う。

死柄木はようやくメインターゲットが現れた事に歓喜しカニバルはメインディッシュが登場した事に歓喜した。

「これでコンテニュー出来る……!」

「ふふふ、ああ早く食べたいなあ」

悪意と狂気。

混ざり合いオールマイトに纏わりつく。  
だが、オールマイト彼は動じない。

# 一瞬

オールマイトが消えた  
かと思うと

死柄木の腹部に強い衝撃が走る。

別に油断していた訳では無い。オールマイトがイレイザーヘッドと生徒の救出の次いでにヴィランを一撃ずつ殴ったのである。流石にそこその身体能力がある死柄木で

も反応は出来なかった。

カニバルも同じ様にされたが彼は殴られたのではなく蹴りを入れられた。

「ああ……ダメだダメだ……！お父さん………」

「うふふふ、あははははっガアハッゲエホッゲホ！」

オールマイトに一撃を貰った二人は同じ場所に寄るように飛ばされ死柄木は顔に着いていた『手』を落とした事に取り乱しカニバルは笑いながら腹を抑え噎せていた。

「はああ……流石オールマイト。国家公認の暴力装置。目で追えないや」

「ケホ……ああ、そうだねえ。僕なんかお腹に蹴りを入れられちゃったよ。お陰で噎せるしポンポンペインだよ」

「……お前……冗談とか言えたんだな……」

「まあねえ☆」

まるで気にしないように笑うカニバルと呆れる死柄木。だが決して気は抜いてない。

「皆、入り口へ急いで。相澤くんはとても危ない状況だ！緑谷くんも足が折れてるようだし……二人で行けるかい？」

「え？？あれえ？？速え……！」

「ケロ……相澤先生一人なら私一人で運べるわ。緑谷ちゃんは片足だけだし峰田ちゃん頼めるかしら？」

「お、おう！任せとけ！行くぞ緑谷」

「オ、オール……マイト……」

オールマイトは救出したイレイザーヘッドと生徒を怪我の無い蛙吹と峰田に頼み戦線の離脱を任せた。

「あーあ…折角良い所まで持ってけてたのに…なあカニバル」

「ふふふ、良いじゃん良いじゃん、大物が来たんだから。これはあれだね、海老で鯛を釣るだね」

「成る程。確かにそうだな」

それを尻目に死柄木とカニバルはやけに緩い空気で談笑している。もつとも笑っているのはカニバルだけだが。

そしてオールマイトが動いた。

死柄木とカニバルにクロスチョップを食らわそうと腕を構え二人に向かってきた。

「カロライナ……」

おそらく技の名前の最初の一言であろう言葉をオールマイトは口にした。

カニバルは大口を開けて交戦しようとする。

「脳無」

だが死柄木がそう呟くとオールマイトと二人の間に大きな黒いモノが現れる。

「SMASH!!!」

それはオールマイトの技を容易く受け  
そして悠然と立っていた。

まさに対平和の象徴戦用改人の姿であった。

# 再せえい

「なっ……!?」

オールマイトは自分の技を受け止めたそれを見て驚愕した。

黒い肌

オールマイトよりもデカイ体格

そして何よりも特徴的な

丸出しの脳ミソ

その異様さにオールマイトは言葉を失った。

「はは、やっぱ凄いな」

オールマイトと対峙する黒い人型を背後から観ながら死柄木が感心したように呟く。  
「そいつは平和<sup>あんな</sup>の象徴<sup>た</sup>を殺すために作った改人<sup>かじん</sup>………脳無だ」

死柄木がそう言い切ると脳無はオールマイトに向かって拳を振り、  
オールマイトはそれをバックステップで避ける。

「そいつの個性はなあ、『シヨック吸収』。衝撃を吸収しちゃうんだ！」

オールマイトが尋ねても無いのに関わらず死柄木はペラペラと脳無の情報を喋る。  
まるで夢を語る子供のように。

「わざわざ聞いても無いことを…」

「そりゃあこつちに勝算があるからさ」

顔に付けた『手』から溢れる笑み。

勝利を確信した笑顔。

「それにコツチには彼奴が……カニバルがいるんだ……なあ!!？」

大きく腕を広げ天を仰ぐ死柄木。

それを訝しげにオールマイトは睨む。

シュバツ

その音は空気を切る音だった。

オールマイトも死柄杓もその正体を見つけようと音がした方を見る。  
だがそんな事をする必要もなく目の前に異常が起きていた。  
血

吹き出す血

それは二人の目の前の大きく黒い肉人形から溢れていた。  
右肩から先が綺麗に無くなっている。

「……おまえ……」

そして

「何やってんだカニバルウウ!!?」

大きな腕を咥えた奴が、カニバルが真正面に立っている。

「ほんだいい？死柄木くん？  
「ほんはひ？ひがらひふん？」

啞えているため上手く呂律が回っておらずそれでも尚喋ろうとするカニバル。

だが邪魔になったのか腕を口から離して喋り始める。勿論腕を抱えながら。

「だつてさあ、この黒いの。折角オールマイトの技を食べたかつたのに奪っちゃうんだもん。その報いさ」

「デメエ、この……！」

カニバルのその言い訳に死柄木はなんとも言い難い、今すぐ襲いそうな憤慨を表情に浮かばせ、ワナワナと震えている。

「……はあ……まあ、いい」

だが死柄木は怒気を鎮めた。オールマイトですら身構える怒気であつたが理性で押し鎮めた、と言うより半ば諦めた様な雰囲気が漂っている。

「折角の作戦が台無しじゃないか……あー、そうだな。実はその黒いの、脳無と言うんだが……まだ秘密があるんだ」

秘密

カニバルもオールマイトも知らない。知る由も無いもの。脳無のそれはすぐに判った。

「…」

二人は驚愕した。

腕の無くなった筈の者から腕が生えてきたのである。

メキヨメキヨと何かが擦れるような音とそれに合わせて蠢き成長する肉の幹。瞬く間に改人脳無の右手は再生した。

「これで元通り。はは、オールマイト。戦力が下がらなくて残念だな」

## 小話②　　ゝお店ゝ

カニバル、喰ケ崎刃食とトガヒミコが後に言われるヘドロ事件を目撃してから数十分後。

二人は暗い裏路地を歩いていた。

いや、厳密には刃食がトガヒミコを背負ってるため歩いているのは一人だけだが。

「結構遠いですね」

「んん、もおうすぐだ、よおつと、みえてきたあ」

そう言つて刃食が指差す先には

黒塗りのアンティーク調の建物が建つていた。

蔦が縦横無尽に伸びているがある程度の手入れはされており窓などには蔓延つていない。またその窓からは怪しく蝋燭が揺らめいている。

そして黒塗りの看板に金の文字で『てろ？ ゃわ』と書かれていた。

「？アレなんて読むんですか？」

「あ、あ。『トウローゴン』だあよお」

刃食は質問に答えながらトガヒミコを背中から降ろす。

「刃食くん背が高くくて楽しかったです！」

トガヒミコはそう言つて天真爛漫な笑顔を刃食に見せる。

「ふふ、そおそれえはよかつたあよ」

刃食もそれに笑顔で返す。彼女のに負けじ劣らずの爽やかな笑顔。

「それでここがステーキの美味しいお店ですか？」

「そおうだあね」

刃食とトガヒミコがここにきた理由は夕食にステーキを食べたいとトガヒミコが言つたため刃食が自分の知つているステーキの美味しい料理屋に連れて来たのであつた。

「ここ、とおもだちいいがあやつて、るんだあ」

刃食の友達。

トガヒミコは気にしていないが

他のカニバルとして刃食を知っている者にとつてそれは衝撃だろう。何故なら刃食に、あのカニバルに友達がいるのだから。

「じゃ、あなかにいはあいろおか」

刃食はトガヒミコの手を引きながら店の中に入って行く。

店の中も黒を基調とし薄暗く照明も間接照明と蠟燭で柔らかくも弱々しい光。その光を所々にある金色の模様や調度品の装飾が妖しく反射する。天井を見上げればシャンドリアが暗い空間の中でも煌びやかに存在を示している。床は黒くも木目が美しいさを醸し出している。

「……………す」

「んうん？」

「凄くオシヤレです！……、大好きです!!」

トガヒミコは驚嘆し感動した。

ここまでオシヤレなお店だとは、そして何より刃食が連れて来てくれるとは思っても見なかった。

例えば連続失血事件の容疑者でも乙女。其れなりの美意識は存在する。

「はは、それは嬉しいなあ」

場に別の声が響き渡る。

一瞬の静寂の後にトガヒミコは声が聞こえたおそらく厨房と思われる所に体を向け

る。

その男は黒いコックコートを身に纏っていた。

頭からつま先まで黒で統一している。

「……誰ですこの人？ 店長さんですか？」

トガヒミコは突然声を掛けられたことにキョトンとしている。

「あああ、ああ……まあそ、ううだねえ。だいたいいあいあつてえるよお」

刃食は若干苦笑いしながら質問に答え、そして紹介し始める。

「こおの、みせえのシェフのお……」

「クラウと言います。以後宜しくお願い致します」

## こうちやあく

「超再生……なるほど」

厄介だな……とオールマイトは呟く。

オールマイト

彼は焦っている。いざという時の肉体破壊も直ぐに治ってしまう。更には衝撃吸収のせいでまともな攻撃は効かないときた。

（どうしたものか……）

今現在は膠着状態。どちらも動いていない。だがオールマイトとしてはその状態が長く続いて欲しくもあつた。

（このまま膠着していればヒーロー達の増援がくる。しかしそれは向こうも分かっている）

ここはある程度の戦闘をしながら増援を待つしかないとオールマイトは考えるが

（大きな不確定要素が一つ……）

カニバルの存在であつた。彼の存在が場の関係性を不安定にさせてしまう。

(先程はあの…脳無とやらに矛先を向けたがそれがもし私や…最悪他の生徒に向かったら……)

考えたくも無い未来が脳裏を過る。オールマイトはそれに冷や汗をかく。

(いやっ！何を考えてるオールマイト！私は平和の象徴としてそんな事を絶対にさせない!!?)

オールマイトは内向きになる己の心を矜持によって持ち直す。

「あああ、良いなあ。ちよおう再生いか。ふふうふ、僕もおだあいぶ落ち着いたしい。ね、ね、死柄木くうん。脳無をお、たべえていいい？」

「嗚呼、漸くいつも通りのカニバルに戻ってきた……ん”ん”、そうだなオールマイトを殺せたら食べていいぞ」

オールマイトの矜持を余所にカニバルと死柄木は約束事をしている。カニバルは怒りが落ち着いてきたのか常時の喋り方に戻ってきている。

「ああ、ううん。脳無かあら肉、きりとおり続けられえいつでもおクラウに料理してえもらあえるなあ」

カニバルはそう呟きながらオールマイトに体を向け脳無の横に立つ。

「ねええ、死柄木くうん」

「なんだカニバル」

「脳無といいつしよおにやるうから合図おおねがぁいい」

それを聞いた死柄木は少し驚くが直ぐに鋭い目つきに変わる。

「ああ、分かった。じゃあ………行け！脳無、カニバル!!？」

その言葉を皮切りに激しい衝突が始まる。

オールマイトに駆けて行く脳無とカニバル。

オールマイトもそれを受けんと身を構える。

最初に脳無の右ストレート。これにはオールマイトは完璧な対応で受け流す。だが脳無の右腕の死角からオールマイトの背後に回るカニバル。これに対しオールマイトは受け流して掴んだ脳無の腕で脳無ごと薙ぎ払う。オールマイトのパワーと脳無の巨きな図体を食らったが文字どうりその衝撃を食べる事によりカニバルはすぐさまオールマイトに飛びかかる。オールマイトも衝撃を食べられないよう胴体を殴るが紙一重で躲し逆に腕を掴まれる。そのまま大口を開けて齧り付こうとするカニバル。オールマイトも振り払わんとするが先程投げた脳無が迫って来ているためカニバルの付いた腕で脳無にフックを決める。この衝撃でカニバルは腕から離れるが今度は脳無に腕を掴まれてしまったオールマイト。カニバルと違いオールマイトより図体のでかく力も

強い脳無は掴まられると振り解こうにも外れる気配がない。むしろ強く握り返される。そして迫ってくるカニバル。オールマイトはカニバルが口を開けているところに渾身の力を持って自分の腕を掴んでいる脳無の腕を引き寄せる。カニバルは脳無の手首を噛みちぎりオールマイトはなんとか脱出に成功した。

態勢を立て直すオールマイト。

次を構える脳無、カニバル。

瞬く間の休息。

今度はオールマイトから攻撃に出ようとした瞬間

カニバルの脚が凍りついた。

## 小話③　　ゝ馴れ初めゝ

「ではこちらにどうぞ」

クラウというシェフに促され席に着くトガヒミコとカニバルの二人。クラウは和かに笑っている。

「当店は肉料理を主体にした経営をさせてもらっています。御注文は御座いますか？」  
クラウの落ち着いた言葉の後にトガヒミコは間髪を入れずに

「ステーキ下さい！」

と元氣よく注文をした。

「はい、ステーキですね。部位は？」

「サーロイン！」

「焼き方は？」

「ミディアム！」

「はい、了解しました。普通のミディアムサーロインミステーキですね、ライスは無料で

いただけますがどうしましょう?」

「お願いします!」

「分かりました」

トガヒミコの注文を事細かに受けた後、クラウは刃食にも注文を受ける。

「刃食さんは?」

「んん、ハアンバアグ、かあな」

「ソースは?」

「デミグラス」

「煮込みますか?」

「おねがぁいね」

「ライスは?」

「いいらなぁい」

クラウは刃食から一通り注文を受けそして一拍おいてから

「…肉はどうしましょう?」

と問いかけた。この時のクラウの表情はどこか期待しているような目をしている。

「あぁ、もちろんおん『ヤンヤオロウ両脚羊』ねえ」

刃食がそう注文するとクラウはとても嬉しそうに

「はい！では誠心誠意料理させて頂きます！少々時間が掛かりますので前菜などをお出ししますね」

と厨房の奥に駆け込んで行つた。

「ヤンシャオロウって何です？！どんなお肉です？！」

とトガヒミコが質問をするが刃食は

「ひみいつ、ね」

と言うばかり。そのうちトガヒミコもその質問をやめて別の質問をする。

「刃食くんはクラウくんとか友達なんですよ？！どうやって知り合つたんですか？！」

「ふうふう、あぁれはいつうだったあかなあぁ」

刃食は想いを馳せる。

5ヶ月ほど前、オールマイトとの一戦を交えた翌日。前日、オールマイトに食事を邪魔された事により刃食はよりアクロバティックに獲物を探していた。

その最中訪れたビルから血の匂いが漂っており刃食が気になって中に入るとそこには『料理』をしているクラウがいたのだ。

すぐさま刃食はクラウを食べようとしたが『料理』の方に気が向きクラウも『料理』を

差し出してきたので食べてみたところなんと大好評。クラウを食べようとした事も忘れてそのまま彼の『料理』のファンになったのだ。

その後、クラウが店を出したいと言うことを聞き刃食は以前知り合った『有名人』に話を持ち込み刃食自身の貯金を何割か使って店を建てて今の関係になったのだ。

「と、いううことおだ、ねええ」

「…そーだったんですか」

「お待たせしました」

刃食の話が終わると同時に料理が運ばれてくる。

トガヒミコの前にはフライポテトとトマトレタスが付け合わせされているサーロインステーキ。それとライス。ステーキ自体には玉ねぎベースのソースがかかっている。

「わあ……」

刃食の元にはデミグラスソースのかかっているハンバーグ。付け合わせにはマッシュポテト。

「んん、いいかぁおりいだ」

「では、ごゆるりと食事を楽しんでください」

## かけつうけ

カニバルの脚が凍りついた事が皮切りに彼らの猛攻は止まった。

カニバルの脚を凍らせた氷は一瞬で広がりカニバルと脳無の全身を覆う。

予想外な事態とあまりの速さより死柄木も脳無に退避を指示できなかった。

「なっ……クソッ!!?」

「呟、ここは私が……ッ!?」

黒霧は二人を転送しようと動くが予想外の事態に襲われる。

「死ねエ!クソがア!!?」

1年A組生徒、爆豪勝己に黒霧自身が拘束されてしまったのだ。

「ハッ!さっき俺の爆破を避けたのはどうやら本体があつたからみてえだなあ!!?」

「クウ……失態!!?」

「いいかあ!!?少しでも動いてみる!!?俺が怪しいと感じたら即座に爆破する!!!」

「ヒーロー志望とは思えない言動だな……」

爆豪が黒霧を取り押さえてるとカニバルと脳無を凍らせた張本人、轟焦凍が前に出てくる。

「どうやらお前らがオールマイト殺しの実行犯と聞いたんで……黒い筋肉ダルマはさつき超再生があると言うのを聞いたからな。取り敢えず脳や心臓など内臓を痛めないように全身の筋肉を凍らせた……超再生があるんだから死なないよな？」

脳無は言われるがまま動こうにも動く筋肉が凍ってしまったため体を静止させている。

カニバルも同様に頭から上以外を覆うように全身が凍っている。だが脳無に比べるとまだ全ての筋肉が凍ってはおらず動けない程度に氷で拘束されていると言うのが正しい。

「ああ……なんで……！折角の脳無が！先生からのプレゼントだったのに……!!？」  
死柄木は陥れる相手だった子供にして様にやられて憤慨しワナワナと震えている。

オールマイトは驚いていた。

自身が護ろうとした子供たちが

「オールマイト！一緒に倒しちゃいましょう!!？」

自身が救けようとした子供たちが

ウイラン

「今敵の主力は無力化しました。今が攻め時です」

「ここまで頼もしいものだったのかと

「動くんじゃあねえぞ!!？」

オールマイトは驚いていた。

だからこそ

「早く逃げなさいッ!!？」

オールマイトは叱った。

「なっ!!？何故です!!？オールマイト!!？敵<sup>ウイラン</sup>達は弱体化してんですよ!!？」

「お言葉ですがオールマイト。正直言つてあのまま二人相手に立ち回るよりその二人を拘束した今、首領であるあの男を俺たちで捉えるべきだと思います」

生徒からの抗議

それも無理はない

彼らは知らないのだから

「良いかい君達。今対峙している相手には君達では危ない奴が………ツ!!?」  
オールマイトが現在最も恐る事態。  
それを説明する隙はなかった。

「こおのてえいどのここうそくうじやあ、だめえだよお」

悠々と

妙な間延びをした言葉を発しながら  
その不退転の災厄は動き出す。

## しんじょう

くるくるくるくる

「あぁっ！何なんだよコイツァ!!？」

綺麗で楽しいなあ。

「クソがァ!!？死にやがれエエ!!」

それにそれに、

「こいつ……氷に限らず爆発まで………」

とってもおいしい。

まさか全身を凍らせるなんて驚いたけど首動かせたから氷齧って氷点下を食べることできて嬉しかったなあ。

ははは、早めの力キ氷だね。

硬いのは歯応えが良さそうだなあ。

手足を折って煎餅みたいに端っこからガリゴリしたいなあ  
刺激的はよく弾けてる。

掌からしか無理なのかな？お肉は弾けないかな？

ぜひ試したい。

ハーフ＆ハーフは氷を出してきてくれるから量を食べれる。

でももう半分からは熱を感じるなあ？半分はキンキンに冷えていながら半分はホカ  
ホカに暖かいのかな？新しいなあ。

「私には目もくれず生徒に手を出すとは!!？デトロイトSMASH!!」

おっと、オールマイイトもいたねえ。

彼の力は色々な風味がして複雑で独特なんだよね。

でもそのパンチはタイミング的に食べるににくいなあ。

「よおつ、と」

楽しいへへへ。

うーん、さっきの蛙と葡萄、そして僕に1発決めてくれた…緑谷くんだけ？彼は良  
い。美味しそうだしオールマイイトと似た匂いがした。しかもあのポロポロな感じはヒ  
ミコが好きになりそうだなあ。

あ、蛙食べたいな。あの鳥に似た風味を味わいたいかな？

「ふふひゅへへえはへ、へへへ」

死柄木くんはさつきから傍観してるだけだなあ。

『手』が美味しそうで困っちゃうよ。

「こいつ…オールマイトのパンチを避けやがった？」

「チイ……ッ」

死柄木くんの個性は舌が痺れそうだけど今ならまだ蛙食べれると思うなあ。

「すごい、いねえ。こおどもなあのに、オールマイトとけっこおお、れんけえいと、れてるうね」

そういえばさつきまで刺激的に拘束されていた黒モヤさんはどうしてついでに踏んでしまったけど大丈夫かなしてるかな？

「……ぐふッ」

「…どうした黒霧」

「いえ…カニバルに解放させられたのは良いのですが…腹を思いつきり踏まれました……」

「…そうか……」

あ、いつの間にか死柄杓くんの隣にうずくまってる黒モヤさんがいるのね。

これでもう刺激的是どこかで見たなと思ったたらヒミコにティティベア買ってあげた日にドロドロに襲われてたね。

いやーあの時美味しそうだと思ってクラウくんのお店でご飯食べたんだよなあ。

「君たち！今私が抑えとくから早く逃げなさい!!？」

おや？

「……そうですね……先ほどはいきなり襲われたのもありましたが……コイツでは俺たちが荷物になってる」

「ふんッ」

おやおや？

「それにもう少ししたら飯田少年が増援を連れて来るだろう……それまで出入り口付近の生徒たちを護っていてくれないかな？」

「…わかりました。行くぞ、切島、爆豪」

「お、おう！」

「俺に指図すんじゃない??？」

……もしかしてなにかなとてもとてもつまらないことをとてもしようとしてる？

.....逃げる気か。

「ひゅうふふゆふひっ.....にがあすか、ああ!!？」

「うわああ!こつち来たあ!!？」

ガリゴリしてあげることしよう!

「切島少年ツ!!？」

んむ? オールマイト? 何をする事を起こす気だ?

「仕方ない! 誰か上手くキャッチしてくれるだろう!!？」

「え、ちょまつ」

腕を掴んで...あー、もしかしてる?

「オールマイトオオオ.....」

.....投げちやうするかあ

## おわり

『昨日の雄英襲撃事件について新しい情報が――…』

### 雄英襲撃事件

あまりの衝撃により日本中に知れ渡り

マスメディアも此処ぞとばかりに取り上げた。

その波紋は表の社会だけではなく裏でも確実に広がっていた。

事件の内容はこうだ

雄英の災害演習場であるUSJにて

生徒の授業中に

ヴィランが襲来

教師であるプロヒーロー、生徒たちはそれに抵抗

しかし現場にいたプロヒーロー2名と生徒1名が大怪我

ヴィランの大多数の逮捕はできたが首謀者と思わしきヴィランは未逮捕。

これが事件のあらましである。

生徒及びプロヒーローに箝口令が敷かれ情報規制されていなければ報道される事件の内容も違ったのだが……………

~~~~~

オールマイトは切島、爆豪、轟を出入り口付近まで投げ飛ばす。

そうして彼と一对一の状況をつくろうとした。

だが彼、敵<sup>ヴィラン</sup>連合の鬼札<sup>ジョーカー</sup>であるカニバルはそう都合よく、思い通りに動いてはくれない。

投げ飛ばした生徒を追ったのだ。

すぐさまオールマイトは追うカニバルの腕を掴み出入り口とは反対方向に投げ飛ばそうとしたが掴まれた瞬間カニバルはその腕を起点にし回し蹴りをオールマイトに食らわせた。

その程度であればオールマイトには効かないが問題は蹴られた場所。そこはかつての大怪我の傷痕だったのだ。

「つぐう……そこは弱いんだっ!!?」

ほんの少し緩んだ隙にカニバルは地を滑る蛇のように生徒の集まる出入り口に向かう。

だが……

「!?」

カニバルの頭部を狙う弾丸が飛んでくる。

間一髪体を捻り回避するがそれは頬を掠める。

何が起きたか?

単純明快。

「先生をお連れしましたア!!」

雄英教師の救援が到着したのだ。

「…………ツチ」

これにはカニバルも顔を歪める。

流石に分が悪いと。

「特殊対策ヴィラン【カニバル】を確認！全員、心して掛かるように!!」

そこから先は凄まじい攻防だった。

プロヒーローによる総攻撃。

プレゼント・マイクによる音波攻撃。

ミッドナイトの眠り香。

キングブラッドの操血。

エクトプラズムの分身。

カニバルもその殆どを回避したり食べたりすることによって逃げるが、攻撃は一切できない。

「今の内だ！カニバルを捕らえろ！」

「年貢の納め時だぞー！」

プロヒーロー達は漸く、今度こそ、捕らえられる、そう思った。

だが現実には、そうやすやすと願いを叶えられるようなものではない。

「！」

「カニバルさん！こちらに!!」

ワーフゲート

黒霧による妨害だ。

「いかん！逃げられる！」

誰が言ったか。否、プロヒーロー全員がそう思った。

カニバルが黒いモヤにのみ込まれていく。

やつの、顔を、みる。

「バイバイ」

カニバルはそう言い、消えた。

今後、カニバルは様々な場所で雄英生徒、及び教師の前に現れる。

怪我人、最悪死者も出るかもしれない。

それでもカニバルは食べ続ける。

彼が満足するまで。

）  
完  
）